

談話における照応表現の指示機能 — 話題指示, 保留指示* —

加藤 雅 啓*

(平成25年9月26日受付; 平成25年10月31日受理)

要 旨

本稿は、談話における照応表現について、話題指示、保留指示を取り上げ、それぞれの指示に関わる機能とその解釈に関わる原則を実証的に検討し、保留指示は話題指示の特殊な例であり、名詞句の同定のみならず、命題の同定にも関与している、ということを明らかにする。

KEY WORDS

談話 話題 ルースな指示 話題指示 保留指示 語用論 機能的文法論 関連性理論

1. 談話における照応表現

1.1 同一指示 (coreference)

談話における照応表現は、一般に代名詞、指示代名詞、定名詞句表現等で表されるが、その基本となるのが同一指示で、同一の人物や物事を指示する用法である。

(1)



(BLONDIE: Oct. 12, 2012)¹⁾

- (1) A₁: Tootsie just told me *she* thinks you're much better at keeping the hedges trimmed than Herb has ever been.
B: *She's* absolutely right! But it's still *his* turn to trim *them* this month.
A₂: Tell Herb *he* didn't fall for it.
C: I tried to tell *him* *he* wouldn't.

読み手の立場から代名詞を解釈すると、(1A₁) (1B) の*she*はTootsieを指示する同一指示の用法として用いられている。(1B) の*his*, *them*はそれぞれ (1A) のHerb, the hedgesを指示し、(1C) の*him*は (1A₂) のHerbを同一指示している。いずれも先行文脈に先行詞を持つ前方照応の例である (cf. Halliday and Hasan (1976))。(1A₂) と (1C) の*he*は外界照応の例で新聞を読んでいる男性を指示している。Wilson and Sperber (1993: 19-20) では、代名詞は手続き的情報を伝え、かつ真偽値に関与するものとして議論している²⁾。(1)の代名詞はいずれも読み手に手続き的情報を伝え、正しい文脈選択を促すことにより、先行文脈にある先行詞を正しく同定することが可能となっている。

1.2 橋渡し指示 (bridging reference)

先行文脈に明示的な先行詞が存在せず、当該文脈で用いられている語句と連想関係にある語群を推論することにより先行詞を同定する指示の仕方を橋渡し指示といい、用いられる推論を橋渡し推論という (c.f. Matsui (1993, 2000), Kato (1996a, b))。

(2)



(BLONDIE: Aug. 21, 2013)

- (2) a. A : Do you remember catering my daughter's engagement party?
 B : I sure do! Are you ready to schedule the wedding now?
 b. A : Do you remember catering my daughter's engagement party?
 B : I sure do! ??Are you ready to schedule a wedding now?

(2B) では、いきなり談話の中でthe weddingという定名詞句表現が用いられていることに着目したい。先行文脈にはthe weddingがどの結婚式を指すのか明示的な形で現れていない。しかし、コミックの読み手は、(2A)のdaughter's engagement partyに関わる百科事典的知識から連想される概念、例えば“announcement of engagement” (婚約発表)、“soon-to-be-husband” (婚約者)、“engagement ring” (婚約指輪)、“wedding” (結婚式)、“honeymoon” (新婚旅行)等の概念を橋渡し推論し、その想起された概念の中にthe weddingの先行詞“wedding”を同定して意味解釈すると考えられる (cf. Matsui (1993, 2000))。ここで用いられているthe weddingが橋渡し指示の用法であることは、(2bB)のように定冠詞を不定冠詞に置き換えると適格性が大幅に下がることから確かめることができる。

興味深いことに、定冠詞を用いた (2aB) と不定冠詞を用いた (2bB) の適格性の判断には、「店員と顧客」「親しさ」などの語用論的要因が大きく関与していると言うことである。店員と顧客の間柄が親しい関係ではない場合、不定冠詞を用いると、カジュアルな印象、あるいは「この店じゃいくつも結婚式の仕出しをしていて、お客さんの結婚式はそのうちの一つにすぎない」というような顧客にとって失礼な感じを与えることがある。このため (2bB) の適格性が低くなると判断されるのである。一方、両者の間柄が親しい関係である場合、(2bB) のように不定冠詞を用いることは不可能ではない。これは、店員と顧客という社会的関係は存在するが、親しい間柄であるために、結婚式を既定のものにとらえ、「その結婚式の仕出し」のことを口にして商売に結びつけるという印象を和らげるために不定冠詞を用いる。あるいは仲間内のジョークとして「この結婚式は誰の結婚式なのかしら」というような言葉遊びのために、わざと不定冠詞を使うこともあるようである³⁾。

1.3 ルースな指示 (loose reference)

内田(2011:207)は、指示表現には先行文脈にその先行詞に相当する対象がないものがあり、この種の指示関係を「ルースな指示 (loose reference)」と命名し、次の用例を挙げている。

- (3) a. We stood on the pavement in the rain, looking for a taxi. Lots of *them* came by but they all had passengers inside them.
 b. 'And where'd you get a rattlesnake, anyway?' 'Buy it. You can always buy *them*. How much shall we charge for that one?'

(3a) では、先行文脈にthemの指示対象である複数名詞句がない。同様に、(3b)においても、themの指示対象である複数名詞句が存在しない。先行文脈の単数形名詞句a taxi, a rattlesnakeを手がかりにして、その複数形を想定し、それをthemが指示している、と解釈する。

(4)



(BLONDIE: Sep. 24, 2013)

(4) Honey, they didn't have any cherry pie, but I did find some cherry-flavored toothpaste for you.

(4) の1コマ目でtheyが用いられているが、コミックの冒頭のためtheyの指示対象は明示されていない。このtheyはcherry pieを買いに行った店に関わる人々(店員など)をルースに指示している例である。

1.4 保留指示 (suspended reference)

これはUchida (1998), 内田 (2011) で提案された指示関係で、次のように定義されている。

(5) 保留指示 (suspended reference)

文法的に保証された指示関係はなく、読み手が一時的に指示関係を仮定し、物語を読み進むにつれてそれが確認されたり、修正されたりする指示関係をいう。(内田 (2011: 209))

(6) Holly, swinging her legs from the kitchen stool, lectures her mother on natural foods. Holly is ten. Waldeen says, 'I'll have to give your teacher a talking to. She's put notions in your head. You've got to have meat to grow.' Waldeen is tenderizing liver, beating it with the edge of a saucer. Her daughter insists that she is a vegetarian. (内田 (2011: 209))

内田 (2011) によれば、(6) では、「Hollyの母親がWaldeenであるという文法的保証はないが、読者は、関連性の原理から、そうではないかと想定しながら読み進み、第5文でそれが確認されることになる」と述べている。すなわち、読者は、her motherは誰のことかわからないので先行詞の同定を保留し、一旦、後続文脈で登場するWaldenのことと仮定して読み進めるわけである。内田 (2011) は、この例に見るように、保留指示は物語冒頭の定名詞句表現、代名詞などがその典型であると指摘している。

1.5 話題指示 (topic reference)

代名詞や定名詞句表現などの照応表現は、談話の話題と密接な関係にあることが指摘されている。この点についてBlakemore (1992) は次のように指摘している。

(7) Once an individual has been made salient a proform can be used for subsequent references. Indeed, it seems that subsequent references must be made by a pronoun. (Blakemore (1992: 66-67))

これは談話である個体が際立ちを与えられると、後続の文脈ではこの対象を指示するのに代名詞、あるいは代用形を用いなければならない、という原則を述べたものである。

- (8) a. Tom_i is here. He_i has brought you a present.
 b. Tom is here. Your brother has brought you a present. (Blakemore (1992: 67))

(8a) では、Tomが談話に登場し、話題となっているため、後続の文ではTomという固有名詞を繰り返す代わりに、代名詞Heを用いている。(8b) はTomとyour brotherが同一指示でない場合に限り容認される。

Fox (1987) は談話における照応表現の基本的な用法について、次のように指摘している。

- (9) The first mention of a referent in a sequence is done with a full NP. After that, by using a pronoun the speaker displays an understanding that the preceding sequence has not been closed down. (Fox (1987: 18))

これは、ある対象を最初に談話に導入する際は完全名詞句を用い、先行文脈での一連の話が後続文脈でも継続していることを示すためには代名詞を用いる、ということを示したものである。これは、言い換えれば、ある対象が話題として継続している場合には、この対象は代名詞を用いて表す、ということである。これらのことから、談話における代名詞の用法に関して、次のような話題指示 (topic reference) の原則を挙げることができる。

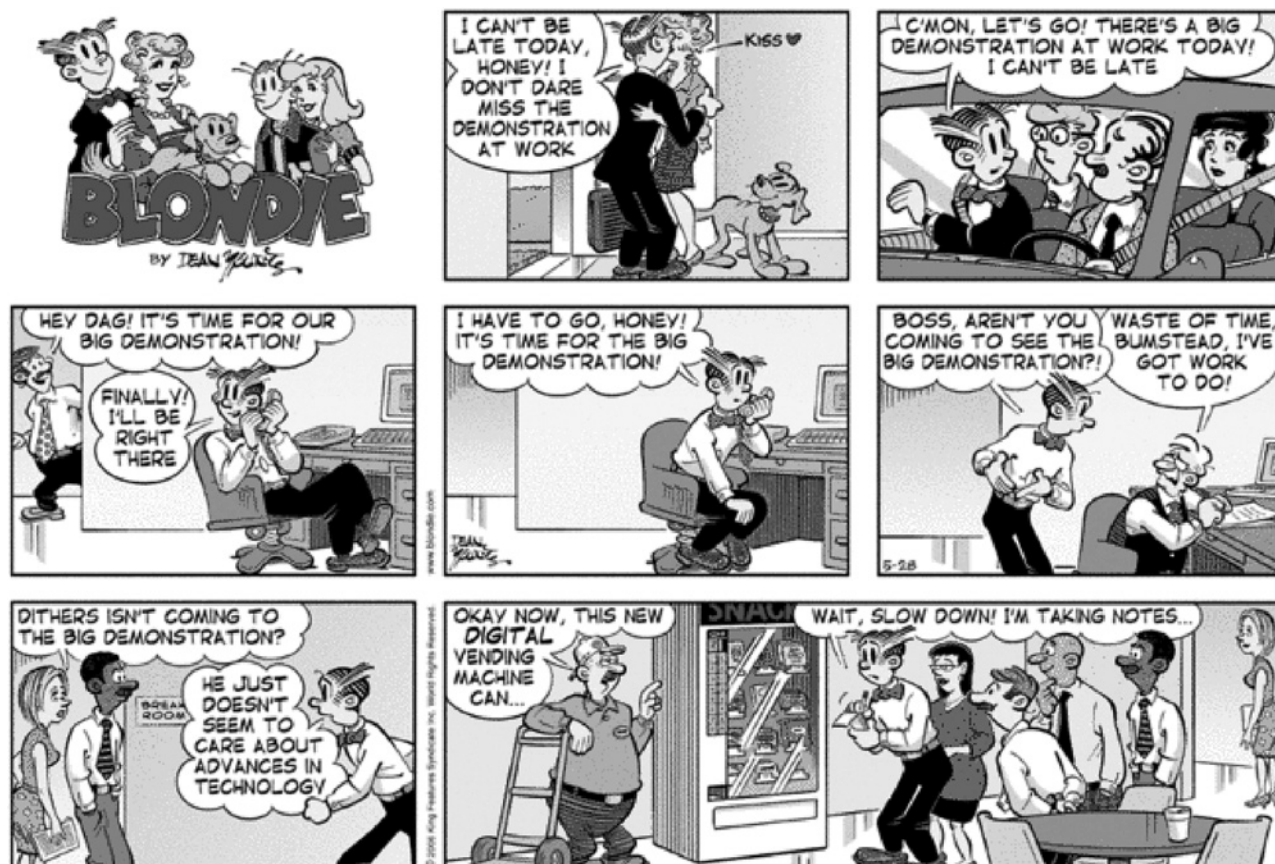
- (10) 談話の中である人物や物事が話題として導入され、引き続いて話題となっている間は、再びこれらに言及する際には、原則として、代名詞、あるいは定名詞句表現などの照応表現を用いなければならない。(加藤 (2000 : 737-738))

本節では、談話における照応表現について、同一指示、ルースな指示、保留指示、話題指示を取り上げ、その概略について例を挙げながら説明した。次節では、保留指示と話題指示について具体例を挙げ、両者の機能についてさらに詳しく分析し、保留指示は話題指示の特殊な例であることを例証することにする。

2. 保留指示と話題指示

次のコミックでは、1コマ目で定名詞句表現であるthe demonstrationが用いられている。読者にはこれがどのような実演なのか不明である。そこで職場で行われる何らかの実演、例えば販売促進の実物を使った実演などであろう、と一時的に指示関係を仮定して、先を読み進める。そして、最後の7コマ目に至り、the demonstrationが職場に新たに導入された自動販売機の実演を指示しているという解釈に行き着く。すなわち、この例ではthe demonstrationは保留指示の用法として用いられていることがわかる。

(11)



(BLONDIE: May 28, 2006)

- (11) a. I can't be late today, honey! I don't dare miss *the demonstration* at work.
- b. C'mon, let's go! There's *a big demonstration* at work today! I can't be late.
- c. Hey Dag! It's time for *our big demonstration!*
- d. Finally! I'll be right there.
- e. I have to go, honey! It's time for *the big demonstration!*
- f. Boss, aren't you coming to see *the big demonstration?!*
- g. Waste of time, Bumstead. I've got work to do!
- h. Dithers isn't coming to *the big demonstration?*
- i. He just doesn't seem to care about advances in technology.
- j. Okay now, this new digital vending machine can...
- k. Wait, slow down! I'm taking notes...

ここで注目したいのは、全7コマのコミックのうち6コマでdemonstrationが何らかの形で言及されていることである。このことから明らかなように、コミック (11) ではthe demonstrationが談話の話題となっていることがわかる。すなわち、一般に、談話冒頭などで用いられる定名詞句表現が保留指示として用いられる場合は、その指示対象は談話の中で話題となっている対象であると思われる。

3. 保留指示の同定

3.1 コミックと保留指示の解釈

次のコミックは保留指示の機能を巧みに利用した例である。

(12)



(BLONDIE: Sep. 27, 2007)

- (12) a. Why is Dithers out today?
 b. Family problems.
 c. What's the problem with his family?
 d. He's a member of it.

このコミックでは、Family problemsが保留指示の例として用いられている。関連性理論の枠組みでこのコミックを読み解くと、次のような手続きを考えることができる。このコミックの読者は、1コマ目の(12b)から、Dithersが欠勤している理由が「家族の問題 (Family problems)」と了解する。しかし、その「家族の問題」が具体的に何を指示しているか不明である。2コマ目の発話(12c)から、読者は家族の問題に関する百科事典的知識から、家族の一人が病気である、借金を抱えている、子どものことで悩んでいる等の一般的な事例を想定して先を読み進める。Family problemsの指示関係の解明を一時的に保留し、その指示関係は後続の文脈で明らかにされるはずである、と考えて読み進めるわけである。しかしながら、読者は3コマ目で(12d)の発話に接し、これまで抱いていた想定は覆されることになる。すなわち、Family problemsの百科事典的知識から導かれる一般的な「家族の問題」はことごとく当てはまらず、「Dithersが家族の一員であること」がFamily problemsの指示対象であるという解釈に立ち至る。これから「Dithersの存在自体が家族にとって問題である」という新しい想定を導き出すことになる。読者は、百科事典的知識から導かれる「家族の問題」に関する一般的な想定と(12d)から新しく得られた想定「Dithersの存在自体が家族にとって問題である」の間のギャップから、しかるべき認知効果を得ることになり、これがこのコミックの落ちとなるわけである。Family problemsは、前節で指摘したようにこのコミックの話題となっていることに注目したい。

3.2 保留指示と命題

内田(2011:211)は、保留指示は同一指示、橋渡し指示、ルースな指示などの照応形式と同様、名詞句を同定するものであると論じている。しかし、保留指示の例を詳細に分析してみると、保留指示は名詞句の同定ばかりでなく、命題の同定に関わっていると思われる例が少なからず存在する。次のコミックは、2つの保留指示名詞句が用いられているが、名詞句の同定ではなく、命題の同定、さらに想起された想定から導かれる推意が保留指示は名詞句の同定に関わっていると思われる例である。

(13)



(BLONDIE: Sep. 9, 2013)

- (13) a. Bad news, honey.
 b. Whoa!! That's no way to begin a sentence!
 c. You're right, dear, sorry... Good news!
 d. Much better! What's the good news, sweetheart?
 e. The airbag in your car worked perfectly.

読者は、1コマ目 (13a) の 'bad news', 2コマ目 (13c) の 'good news' についてその指示対象が明らかでないため、それぞれに関わる百科事典的知識から、例えば、お金を落としたとか親戚が病気になったなどの「当事者にとって好ましくない事象」、あるいは宝くじに当たった、会社で昇進したなどの「当事者にとって好ましい事象」などを想定して読み進める。2コマ目の "What's the good news, sweetheart?" という問いに対して、3コマ目で (13e) "The airbag in your car worked perfectly." と答えている。ここで、the good newsは (13e) の文全体、すなわち「あなたの車のエアバッグは完璧に作動したこと」という命題を指示していると考えられる。さらに、読者はさらに次のような想定を抱くと思われる。

- (14) 想定1： もし、車に何らかの強い外力が加わったとすると、車のエアバッグが動作するはずだ
 想定2： もし、エアバッグが動作したとすると、第三者の車や壁・立木などに衝突したのかもしれない
 発話： (13e)
 推意1： 想定1 + 想定2 + 発話 (13e) ➡ この女性は彼の車をぶつけたのだらう
 想定3： もし、車をぶつけたら運転者は怪我をしたかもしれない
 想定4： もし、エアバッグが正常に動作すれば、運転者の怪我は軽くてすむかもしれない
 発話： (13e)
 推意2： 想定3 + 想定4 + 発話 (13e) ➡ 運転者の怪我は軽くてすんだのだらう
 想定5： もし、運転者の怪我が軽くてすんだのであれば、それは不幸中の幸いで、よいニュースであろう
 場面情報： 運転者は怪我もせず元気な姿である
 推意3： 推意1 + 推意2 + 想定5 + 場面情報 ➡ 事故を起こしたけれど (エアバッグが作動し)、運転者に怪我がなかったことはよい知らせであらう

読者は「全ての発話は最適な関連性の見込みを伝達する」という関連性の伝達原理に基づき、3コマ目の発話 (13e) から遡及的に (14) の想定1～5と推意1～3を導き、(13c) の保留指示名詞句 'good news' はその指示対象として推意3を同定し、費やした処理労力に見合う認知効果を手にする可以考虑することができる。

4. まとめ

本稿は、談話における照応表現について、同一指示、ルースな指示、話題指示、保留指示を取り上げ、それぞれの指示に関わる機能とその解釈に関わる原則を実証的に検討した。また、談話冒頭に用いられる保留指示の指示対象

は、通例、当該の談話に話題となっていることから、保留指示は話題指示の特殊な例であることをコミックの例を挙げて例証した。さらに、保留指示は内田（2011）で指摘されている名詞句の同定に関わるだけでなく、命題の同定にも関与しているということを示した。

*本論文は、平成25年～平成27年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究(C)（課題番号：25370546，研究代表者：加藤雅啓））の援助を受けてなされた研究の一部である。本稿を作成するに当たり、Ivan Brown氏には英文の適格性の判断のみならず、冠詞の使用に関わる語用論的要因について有益な示唆を得た。ここに記して感謝の意を表す。いうまでもなく、本稿の不備は著者のみの責任である。

注

- 1) 本論文で引用しているコミックBLONDIEの著作権については、Ms. Dianne Erwin, Director of Marketing for the Blondie Comic Stripを通して版元より掲載の許諾を得ている（June 20, 2013）。
- 2) 代名詞の手続き的情報に関しては、Wilson and Sperber（1993）は次のように述べている。

‘I’ and other pronouns are both truth-conditional and procedural,... We have now looked at two quite different types of procedural expression: discourse connectives and pronouns... Pronouns impose constraints on *explicatures*: they guide the search for the intended referent, which is part of the proposition expressed. (Wilson and Sperber (1993: 20-21))

このように、Wilson and Sperber（1993）では、代名詞も手続き的情報を伝え、真偽値に関与すると指摘されている。代名詞の手続き的情報については、概略、次のようなものを仮定できると考えられるが、これについては、稿を改めて論じることとする。

(i) 代名詞は、聞き手・読み手が文脈を選択し、速やかにその指示対象を同定し、処理労力を減らすことにより関連性を高めるのに貢献する。

- 3) (2aB), (2bB) における定冠詞、不定冠詞の使用をめぐる語用論的要因については、同僚のIvan Brown氏との議論が有益であった。

参考文献

- Ariel, M. (2008) *Pragmatics and Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Oxford: Blackwell.
- Bolinger, D. (1972) *That's That*, Mouton: The Hague.
- Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*, London: Longman.
- Carlson, L. (1983) *Dialogue Games: An Approach to Discourse Analysis*, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- Fox, B. (1987) *Discourse Structure and Anaphora: Written and Conversational English*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Halliday, M. A. K. (1967) "Notes on transitivity and theme in English," *Journal of Linguistics* 3: 177-274.
- Halliday M. A. K. and R. Hasan (1976) *Cohesion in English*. London: Longman.
- Halvorsen, P-K. (1978) *The syntax and semantics of cleft constructions*. *Texas Linguistic Forum, II*. Department of Linguistics, University of Texas, Austin.
- 東森勲・吉村あき子 (2003) 『関連性理論の新展開—認知とコミュニケーション—』東京：研究社
- Horn, L. (1981) "A pragmatic approach to certain ambiguities." *Linguistics & Philosophy* 4: 321-358.
- 今井邦彦 (編) (2009) 『最新語用論入門12章』ディアドリ・ウィルスン, ティム・ウォートン著, 東京：大修館
- 今井邦彦・西山佑司 (2012) 『ことばの意味とはなんだろう—意味論と語用論の役割—』東京：岩波書店
- Kamio, A. and M. Thomas (1999) "Some Referential Properties of English *It* and *That*," *Functions and Structure: In Honor of Susumu Kuno*, ed. by Akio Kamio and Ken-ichi Takami, 289-315, Amsterdam: John Benjamins.
- Kato, M. (1996a) "Referring Expression in Discourse: Relevance-Theoretic Approaches to Pronominal Anaphora and Bridging Reference," *International Journal of Pragmatics* VI, 1-17. Pragmatics Association of Japan.
- Kato, M. (1996b) "Bridging Reference: A Relevance-Theoretic Approach," *ENGLISH USAGE AND STYLE* 13, 30-40. The Japan Society of English Usage and Style.
- 加藤雅啓 (1998) 「分裂文とwh分裂文の排他性含意」 *International Journal of Pragmatics* 8: 33-48.
- 加藤雅啓 (2000) 「談話における結束性とその指導(1) —同一物指示について—」『上越教育大学研究紀要』19-2, 733-745.

- 加藤雅啓 (2002) 「分裂文と疑似分裂文の総記的含意」『英語青年』2002年7月号, 東京: 研究社出版 236-237.
- 加藤雅啓 (2013) 「談話における代名詞の話題指示と保留指示—機能文法理論と認知語用論の棲み分け—」『言語学からの眺望 2013』福岡語学会, 九州大学出版会
- Matsui, T. (1993) "Bridging Reference and the Notions of 'Topic' and 'Focus'," *Lingua* 90, 49-68.
- Matsui, T. (2000) *Bridging and Relevance*, Amsterdam, John Benjamins.
- 太田朗 (1980) 『否定の意味 意味論序説』東京: 大修館書店
- Otake, Y. (2002) "Semantics and Functions of the *It is that*-Construction and the Japanese *No da*-Construction," *MIT Working Papers in Linguistics* 43, 143-157.
- 大竹芳夫 (2009) 『「の(だ)」に対応する英語の構文』東京: くろしお出版
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of The English Language*. London: Longman.
- Sperber D. and Wilson, D. (1986/1995²) *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.
- Uchida, S. (1998) "Text and Relevance," *Relevance Theory: Applications and Implications*, eds. by Carston, R. and S. Uchida, 161-178, Amsterdam: John Benjamins.
- 内田聖二 (2011) 『語用論の射程—語から談話・テキストへ—』東京: 研究社出版
- Valluvu, E. (1992) *The Informational Component*. Outstanding dissertations in linguistics. New York: Garland Publishing, Inc.
- Wilson, D. and D. Sperber (1993) "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90: 1/2, 1-26.
- Wilson, D. and D. Sperber (2012) *Meaning and Relevance*, Cambridge: Cambridge University Press.

Referential Functions of Anaphoric Expressions

—Topic Reference and Suspended Reference—

Masahiro KATO*

ABSTRACT

This article deals with the referential properties of anaphoric expressions in English with special attention to topic reference and suspended reference. The main points argued here are (i) that reviewing Uchida's (2011) proposal regarding suspended reference, and I make a supplementary statement to it that suspended reference is a special case of topic reference; and (ii) that in the framework of Relevance Theory, I analyze several examples of suspended reference cited from comic strips, and demonstrate that suspended reference is responsible for not only identifying the antecedent noun phrase but for identifying the proposition inferentially derived from assumptions and implicatures bearing on the utterance in question.

* Humanities and Social Studies Education